

四季の豊かな上越は 心のふるさと

仙台市青葉区 植村千枝（西城町出身）



関山あたりから残雪に覆われていた沿線の風景は一変、記憶の底にある雪解け頃の黒土が表われ、芽吹いたばかりの若葉が光る。一路「高田」駅へ。今から九

年余り前の一九九四年（平成六年）四月十四日のことである。この日は附属小学校昭和十五年卒のクラス会で、何十年ぶりの上越市である。地元在住の友の企画射を射て、お城の桜は満開！！恩師を囲み、関西、東京方面、そして東北と全国に散らばった約三十名余りの同級生との再会を喜びあった。夜桜見物もし、五智の海の家で一泊。

それから六年後二〇〇〇年（平成十二年）十月十五日恩師の墓参も兼ねたクラス会に、再び上越を訪れた。宿は紅葉が美しい妙高簡保の宿。

私が旧高田市に住んだのは、公務員の父の任期中で、小学校四年から高等女学校一年の四年間（一九三八年～一九四一年）のわずかな時期である。だが、思春期に当り、上越の四季の豊かな風土に育まれ、感性を磨かれたように思う。今年

の妙高の初冠雪は九月三十日とか。當時も秋になると妙高を仰ぎ、三度白くなる。と街にも雪が降る・・・と待ちこがれた。庭木の冬開い、食糧保存のため沢山の漬物作り、雪下ろし、カンジキで雪道をつける親達の苦勞を尻目に、暗くなるまでスキーに興じた子ども時代、今も原風景として甦る。

Jネット会長、太田四郎氏とは光栄にも小学校の同級生である。名古屋に在住され、ご多忙の中を郷土のため尽力されておられる様子を、クラス会の度に伺い、遅まきながら今年度から入れていただいた。会報、広報等を企画課から送っていただき、情報を通してぐんと近くなった気分である。市民本位の細やかな行政の姿が、随所に読み取れるのもうれしい。

低成長、人口減に将来を案じる方も多いが、二十一世紀は、開発からまぬがれた豊かな自然を再認識し、次代に伝えることを考えたい。そのため行政は循環型まちづくりを、市民と一体となって実現する方策に取り組んでほしい。

長く教育に関わってきた私の知り得た範囲だが、将来を担う上越の子どもたちに期待がもてるのである。たとえば大手町小学校の農業を中心とした総合学習、附属小学校の子ども主体の実践研究など、全国的に注目を集めてきている。有

能な現場教師の再教育を主体とする上越教育大学も、独立法人化を機に更に地域教育に門戸を開き、貢献してほしいと願っている。

